

LLにおけるコミュニケーション・ティーチング —その可能性と限界—

広島大学大学院

竹 中 龍 範

1 コミュニカティブ・ティーチングの意義

今日、外国語教育の方向は学習者にコミュニケーションの手段としての言語を習得させるという目標に向かっている。すなわち、これまでの言語学的言語分析の結果に拠り、それを応用するのではなく、言語を人間が意志疎通を行う際に用いる手段として看、さらにはそのような活動がなされる場面に含まれる諸々の要因をも分析し、それを基に外国語教育のあり方を求めていると言えよう。Rivers の言葉を借りれば micro-language learning より macro-language use へと方向転換がなされているわけである(⑩: 250-251)。このような動きは Communicative Teaching (以下 CT と略す)、あるいは Communicative Language Teaching と呼ばれている。

このような CT においては学習者が伝達能力 (communicative competence) を習得することが目標とされる。学習者は、言語構造を操作する能力だけでなく、それをコミュニケーションのために用いる際の規則に関する知識、特定の言語形態を場面要因に結びつけて意図した意味を表現し、また解釈する能力をも習得しなければならない(⑨: 131)。この後者の知識、能力は Rules of Speaking, Communication Rules 等の名称で呼ばれているが、CT のコース編成、教材作成の際には不可欠の要因となる。

本小論は LL を利用して CT が行えるかどうかその可能性を探ろうとするものである。もちろん、そこには自ずと何らかの限界性が存在しようが、それを越える方策も求めてみたい。ただ、LL における CT といってもさまざまな問題が含まれており、今回は hardware の面に焦点を絞り、software の問題については CT に対する LL の在り方に関して基礎となる点のみに触れ、具体的な問題についての考察は他日の機会に譲りたい。

2 コミュニカティブ・ティーチングと LL

LL の発達により外国語教育がより高い成果を収められるようになったことは汎く認められるところであろう。しかしながら、反面、LL 出現の際に関係者が期待したほどの成果があがっていないことも否めない事実である。それはひとつには LL のもつ限界に対する認識がその利用可能性追求の陰に隠れていたことによるものであり、さらには LL と普通教室との連携が望ましい形で行われていなかったことによる、と言えよう。

LL の有する長所はいくつか挙げられる。例えば Dakin が 'Each learner ...' と述べているように(⑤: 2-3)、個々の学習者が自らの活動として学習作業を進めることができる、という点がある。また、生の音声に接する機会が多くなることも挙げられよう。しかし、同時にそこには欠点も存するわけであり、その認識が不十分であればそれだけ LL の利用可能性が減じられることになる。その欠点を補う方策が求められねば限界はいつまでたっても限界でしかない。

さて、そのような欠点のうち、LL における CT を考えた場合、最も問題となるのが LL は聞く練習には適しているが話す練習には必ずしも適さないという点である。これはラジオ放送とか駅の構内放送のような one-way コミュニケーションの場合を除いて、相互交流としてのコ

コミュニケーションの姿を反映していない。このような条件下で行いうる話す練習の形態としては模倣練習および操作練習が挙げられる(⑧:106)。もちろん、このような練習も必要であるが、それを実際のコミュニケーションと結びつけることが考えられねばその効果は減ずるだけである。LLの一方通行的な性格に対し、interbooth communicationの形も考えられるが、それが学習者間のやりとりだけに終わってしまえばrules of speakingの習得という面で不充分ならざるを得ない。

また、個々の学習者が自分のペースでといっても、授業としてLLを利用する場合は決して個別化授業が行われているわけではない。学習者はほかのことを考えたり、他教科の宿題をしたり、居眠りしたりして、モニターされている時だけ機械的に発話練習を行っているというChadwellの指摘するようなケースは数多くないにせよ(⑨:17)、退屈さを醸し出す要素があることは否めない。個別作業の陰にpersonal contactというコミュニケーションの主要素が隠れ、延いては学習者の動機づけに関わる問題となっていることは一考を要する。

このような欠点を補うためにLLのあり方を再考しようとする際、Garnettの設けた6つの基準が一応の目安となるが(⑩:319)、ここではそのうち第6の基準を中心に、第3、第5の基準の必要条件となるものを求めることとする。第6の基準とは“efficient and quality machinery that is adjustable to the needs and aims of individual school programs”というものであり、第3、第5の基準とはそれぞれ“excellence of program materials, closely related to the classroom materials”, “frequent and regular practice sessions, preferably two twenty-minute sessions each week”である。

3 コミュニカティブ・ティーチングをめざしたLL設備

上に述べたように、これまでのLL設備は幾つかの欠点をもっており、そのそれぞれがコミュニケーション・ティーチングの方向にそって解決されなければならない。まず、個別化の点については、従来のLLではコンソールより流される教材による一斉指導を行うものとし、それとは別にopen-lab systemの部屋を設けることが望まれる。というのは、従来のLLではindividualized workは行えてもそれがindependent workになることが難しいからである。また、学習者個人によるremedial workのためにもopen-lab systemの必要があろう。Chadwellの提案する方法は一考に値する(③)。ただし、この方法もopen labのみに拠るのでは自ら可能性を縮めることとなる。従来のLLと相互に補い合うものでなければならない。

一方、従来のLLも再検討の要がある。音声重視によるaudio aidsとともに、それに直接繋がった形でのvisual aidsが必要であり、かつ効果が大きいことはStack(⑩:16)の指摘を俟つまでもない。コミュニケーションの具体的場面を与える上でも視覚面の設備の充実が望まれる。練習用の発話を提示する際に、演繹法によるにせよ帰納法によるにしても、rules of speakingの習得という点で視覚による状況認識は重要である。また、コミュニケーション活動が一方的で受身的になる点を補うためにはinterbooth communication systemの設備が要求される。ただしこれにも限界があることは認めておかねばならない。すなわち、有能な指導者によるモニターがなければいくらか自由会話に近い形で練習が行われるとしても完全なコミュニケーションにはほど遠いからである。

また、普通教室での授業とLLでの授業との連携も大きな問題である。普通教室での授業内容の音声面をLLで指導するような、普通教室に対するLLの従属関係は望ましいものではない。普通教室で行うべき授業、LLにおいて行うべき授業を考え、それが全体としてCTを

構成するような相互補完的なものでなければならない。LLでの授業に物理的に出席していても実質的な学習がなされなければ学習者の動機づけも損なわれ、LLと普通教室との連携が不十分であることが証されるだけであるとの指摘もある(⑩:14)。コース編成の際に重要な問題としてこの点を考慮しておかねばならない。

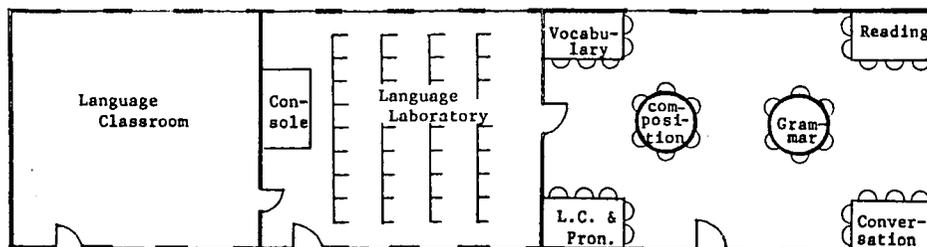
4 コミュニカティブ・ティーチングをめざした LL 教材

まず、CTの教材編成の際に問題となるのは文構造による編成と言語の機能の分析に基づいた編成をどのようなバランスで組み合わせるかということである(⑨:132)。CTは構造シラバスを排除するものではない。構造シラバスにより内化された言語構造をコミュニケーションの場面で機能させる能力を学習者に習得させるのがCTである。また、Bruderの指摘にもあるように、communicative competenceの発達には自由練習とともに制限付きの練習も必要である(②:xi)。これらの点については前述のごとくLLの特徴、すなわち、模倣練習、操作練習に適するということがとりあげられるべきであろう。構造練習を中心とした活動はLLを中心とすることが考えられる。コース編成の方法としては、文法による編成、場面による編成、話題による編成、機能・概念による編成があるが(④)、これらは相互排他的なものではなく、CTの構成要素であるとみたい。そのそれぞれの特徴に応じて、普通教室、従来のLL、open systemのLLの有機的連携を計る際の基本的視点とされなければならない。

一方、見方を変えて、コミュニケーション活動の分析も必要となる。Guntermannの挙げている6つの範疇は包括的なものではないがひとつの視点を与えてくれる(⑦:222)。これは授業の中で行いうる活動を基にした分類であるため、実際のコミュニケーションに較べ制限が加えられるのは止むを得ないが、練習形態の決定などに重要な指針となるものであり、同時に教材編成の基準のひとつとなるものである。

5 おわりに

このように考察してみると、CTのためには従来のLLは限界の大きいことがわかる。もっとLLを有効に利用し、またCTを実践するために、Assistant Masters AssociationおよびChadwellを参考に(①:17;③:17)、次のようなフロー・プランを考えてみた。語学専用の特別教室を考えたのは図書や風物に関する知識を助ける品物などが常備されている部屋が学習



者の動機づけの点からも必要であると考えたからであり、できれば教室設けたいところである。また、それとLLとが隣接しているのは、例えば50分の授業を25分ずつに分ける場合も考えら

れるからである。

以上 hardware の問題を中心に LL を利用した CT の可能性を検討してみたが、決してこれで万全の設備とは言えない。なお一層の考察が必要であるが、それにも増して software の問題は大きい。ともに今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 1 Assistant Masters Association, The (1979) *Teaching Modern Languages in Secondary Schools*. (Hodder and Stoughton).
- 2 Bruder, M.N. (1974) *MMC: Developing Communicative Competence in English as a Foreign Language*. (University Center for International Studies, Univ. of Pittsburgh).
- 3 Chadwell, C.S. (1979) "Opening the Language Hub," *TESOL N*, 13, 3, 17-18.
- 4 Cook, V.J. (1978) "Some Ways of Organising Language," *AVLJ*, 16, 2, 89-94.
- 5 Dakin, J. (1973) *The Language Laboratory and Language Learning*. (Longman).
- 6 Garnett, N.A. (1967) "Making the Language Laboratory Effective," *Hispania*, Vol. 50; quoted in Scavnicky, G.E.A. (1976) "Successful Language Laboratory Performance," *NALLD J*, 10, 2, 25-33.
- 7 Guntermann, G. (1979) "Purposeful Communication Practice: Developing Functional Proficiency in a Foreign Language," *FLA*, 12, 3, 210-225.
- 8 Howatt, A. and J. Dakin (1974) "Language Laboratory Materials," in J.P.B. Allen and S.P. Corder (eds.), *Techniques in Applied Linguistics*, 93-121. (Oxford Univ. Press).
- 9 Littlewood, W.T. (1978) "Communicative Language Teaching," *AVLJ*, 16, 3, 131-135.
- 10 Rivers, W.M. (1976) "Individualized Instruction and Cooperative Learning: Some Theoretical Considerations," in *Speaking in Many Tongues: Essays in Foreign-Language Teaching*, Expanded 2nd ed., 236-255. (Newbury House).
- 11 Stack, E.M. (1977) "The Evolution of the Language Laboratory: Changes during Fifteen Years of Operation," *NALLD J*, 11, 2, 8-16.